

笠原則孝



住みよい町にするための環境整備を求める

町長 町民の協力を得て、安心安全なまちづくりを進めていく

質問 町道には犬のふんが散乱しており、飼いの主のマナーの悪さが目立つ。町としてどのような対策を行っているか。

答弁 町長 年に1度、狂犬病予防注射の際に、飼い主向けの啓発ビラと犬ふん取りの袋を配布している。



質問 防犯灯の設置は適切か。

答弁 町長 原則、住民の要望に基づき、各区

で設置していただいております。設置費用と電気料の一部を町が補助している。区の管理が2500基、町の管理が通学路に322基ある。

質問 生活保護費の受給者が、半年で約20人増加している。町として何らかの対策を行っているか。

答弁 町長 厚生労働省の発表では、全国で

208万人が生活保護受給者であり、現在も増え続けている。町としては、ライフラインが停止している生活困窮者の把握、生活の相談、ハローワークとの連絡を密に取り、就労支援にも力を入れている。

質問 全国の公立中学校の約3分の2が、群馬県では、173校中、約87%の152校が柔道を選択している。年間10時間程度の授業では時間が短く、危険ではないか。

答弁 教育長 玉村町の中学校には、7名の体育教員がいる。うち4名が教員養成課程で柔道の単位を履修しており、この他にも顧問教諭がいる。安全対策を徹底するよう指導し、心と体の健全やかな生徒を育てたい。

質問 町長は、選挙公約で花火サミットを行うと表明している。その考えを問う。

答弁 町長 玉村町の花火は、全国でも10番以内に入るほどの人気である。これを観光資源とし、まちづくりに活用したい。

備前島久仁子



高齢化社会に求められる「たまりん」の運行見直しを

町長 高崎便を延伸し、伊勢崎便は増やす

質問 利用客が減少している「たまりん」の路線見直しと、新しい路線は。

答弁 町長 利用者が少ない路線は減らし、高崎便は黒沢病院ヘルスパーククリニクまで延ばす。そこから高崎市の「ぐるりん」に乗り換え、高崎駅までアクセスできる。利用者の多い伊勢崎便は、増便をする。

質問 協働によるまちづくり推進事業が、形になって始まりをみせた。「ばる」の開設、運営委員会の発足は、住民がみずからの手でまちおこしを担いたいという意志の

あらわれである。水辺の森を活性化する構想も膨らみ、これから期待される。今後の展望は。

答弁 町長 協働によるまちづくり基金を創設し、行政だけでは解決できない地域課題を、住民と協働で解決していく経費に充てたい。水辺の森を多くの人に知ってもらおうと「清掃や花の植えつけ」作業が始まるが、町と住民との協働作業のモデルになると考えている。

質問 国際化が進む中で、国際交流協会の担う役割は重要である。しかし、協会の存在がまだまだ知られていない。企業へ研修に来てもらう外国人の日本語サポートも引き受けているので、企業への団体登録を積極的に呼びかけるべきでは。

答弁 町長 今年で創設18年目となる協会は、現在では住民活動団体として、外国人との交流や日本語教室を行っている。団体登録は積極的に進める。



住民とともに協働のまちづくりを水辺の森で彼岸花の植えつけをするボランティア

高齢者の居場所づくりの推進を求む

町長 筋トレ事業を通して身近な憩いの場に結びつけたい



三友美恵子

質問 利根川新橋の早期建設のための施策を問う。

答弁 町長 関係市町で整備が進められる区間は既に整備が終わり、供用が開始されている。新橋周辺の変化に機運が見え始めたので、今後も関係者と連携し、県に対して要望活動を進めていく。

質問 平成21年滞納処分取り消し等請求事件について、町の危機管理体制を問う。

答弁 町長 従来は、法令審査委員会の審査過程において法的な判断のみに偏りがちだった。しかし、今回の事案を契機として、それぞれの課の立場に立ち、より多面的な角度から考え、結論を出すことにした。今後も役場としての公平・公正、適正・適法な対応ができる態勢を整えていく。

質問 第4期高齢者保健福祉計画・介護保険計画の検証を、第5期計画にどのように反映させるのか問う。

答弁 町長 高齢者の増加に伴い介護認定者数も増加しているが、介護需要

の高まりから介護事業所も増えている。策定に当たっては、第4期計画を継続する。今後も「介護サービスの需要の把握」と、特に重要な「介護予防の取り組み」に努める。

質問 高齢者の居場所づくりについて問う。

答弁 町長 老人福祉センターや地域の公民館などで、高齢者向けのさまざまな事業を行っている。筋トレ事業のほかにも情報共有の重要な拠点となっており、人間関係の再構築にも有効だと考える。高齢者だけでなく、誰もが気楽にぶらりと行ける居場所についても、今後考えていく。

住民活動サポートセンター“ばる”の登録団体『ふれあいの居場所ふれんど』の筋トレ活動



県央で町長はリーダーとなれ

町長 周辺市との絆を強固なものにしたい



柳沢浩一

質問 玉村町は人口の減少傾向が続いているが、どんな対策・対応を考えているか。

答弁 町長 東毛広域幹線道路の開通が平成26年には実現するため、スマートIC周辺の開発に着手する。今議会にも、そのための予算を計上した。

質問 東毛広域幹線道路の完成が見えてきた。次は、前橋市と玉村町を結ぶ利根川新橋の建設に力を尽くし、めどをつけてほしい。

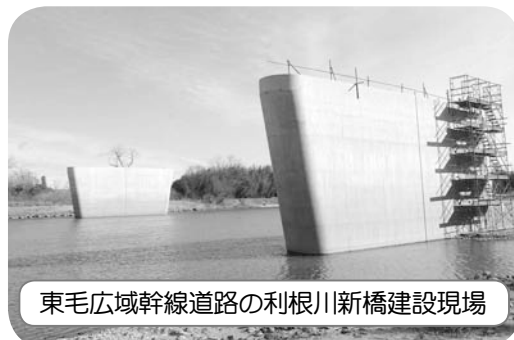
答弁 町長 思いは同じだが、今このほかにも3つの新橋建設計画がある。厳しい問題だが、先頭に立ち、頑張る。

質問 今や貫井町長は、近隣市町村の首長の中でも、一番のベテランである。さまざまな課題に対し、リーダーシップを発揮してほしい。

答弁 町長 懸命に頑張ってきたら、いつの間にか年月がたつていた。周辺市町との絆を、より強固なものにしたい。

質問 物産館をつくるのか。その際には、みずから公社理事長として運営してほしい。

答弁 町長 もちろん、そのくらいの覚悟で取り組みたいと考えているが、まだ越えなければならぬハードルがある。



東毛広域幹線道路の利根川新橋建設現場

答弁 町長 職員はもちろん、議会、町民の皆様とともに、真剣に立ち向かう。

質問 このまま減少傾向に歯どめがかからなければ、10年後には町の人口は3万5000人になる。この事実を皆で共有するべきだ。